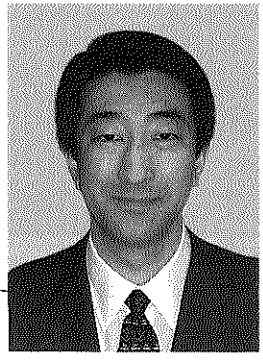


漢方薬というと、その独特の匂いと味を想像される方が多いと思う。しかし最近では、エキス剤の普及により、漢方薬といっても煎じ薬でない場合が多い。エキス剤といえども一度煎してから製剤化しているのだから、生薬を材料とするものには変わりない。

一口に生薬といっても、根もあれば、葉もあれば、キノコもあれば、鉱物や動物性のものまである。例えばは蟬の抜け殻や、ヒル、アブ、ミミズなども漢方薬の材料となる。

帰という生薬があるが、これなどは晩秋に根を掘り起こし、湯もみしてから乾燥する。附子はトリカブトであるが、有毒アルカロイドを含むため、加熱・加圧処理や石灰にまぶしたり、塩づけにしたりする。このような処理を修治という。漢方薬の材料一つとっても手が

慶應大学医学部助教授



渡辺 賢治

漢方シリーズ ⑤

込んでいるのである。

このように手間がかかることから、日本では漢方薬の材料となる生薬の栽培農家がどんどん減っている。残念ながら、生薬の供給は海外からの輸入に依存しているのが現

貴重な生薬資源

実である。その多くが中国である。しかし、最近の中国の経済成長によって、生薬の値段が上昇し

ある。

決まっております、生薬単位での保険適用となる。

である。

また、中には栽培困難な生薬もある。甘草、麻黄などは野生品を採ってきたがために、砂漠化を招いて大きな社会問題となっている。甘草は薬として用いられるよりも甘味料として用いられることが多く、その使用量は莫大であるが、供給が追いつかなくなってきている。このほかに、供給と需要のバランスが崩れつつある生薬は多々ある。

困ったことに2年ごとに薬価の見直しがあり、新薬同様、生薬の値段も下がってきている。新薬の場合は開発費に莫大なお金がかかるために、初めの値段を高く設定して徐々に低下していくのは理にかなっていると思う。しかし生薬の場合はどうであろうか？ 生薬は野菜と同じように時価である。前記のように原材料費は徐々に上がってきているのに、薬価はほとんど下がっていく。それに合わせて、使える生薬の品質が下がっている。すなわち医療の質そのものが低下している。

前記に挙げたように、生薬を取り巻く課題は多い。漢方医学は世界でも最も完成された統合医療であるが、高品質の原材料もそれを支える要因の一つである。医療の質を担保する意味でも、いい生薬原料が使えるシステムを継続させることが重要である。同時に現在流通している材料を大切にすることも考えなくてはいけない。患者さんには「漢方薬は大事に飲んで下さい」とお願いしている。われわれ医療提供者も、限られた資源である生薬ないし生薬を原料としている漢方薬を大切に扱う必要がある。